

【発情した獣人女戦士とハッスル☆旅籠えっち】

●タイトルコール

ラピス

「ぱちぱちぼいす」

ラピス

「発情した獣人女戦士とハッスル☆旅籠えっち」

●あらすじ

ラピス

「旅仲間の獣人、ラピスの様子がおかしい」

ラピス

「獣人には発情期があるらしく、あなたの身体をみて興奮してしまう」

ラピス

「自分を抑えられなくなった女戦士のラピスに力で敵うはずもなく、強く求められて、されるがままに！」

ラピス

「獣人との激しい交尾を行ってしまうのだった」

●トラック1

【シチュエーション】

同室での宿屋

ラピス

「ふう、大分時間がかかったけど、真っ暗になる前に帰ってこれてよかったね」

ラピス

「依頼された魔物、強くはないけど、やたら頑丈だったし……あたしたち二人がかりでいくら叩いても倒れないんだもん、もう疲れちゃったよ」

ラピス

「ふあーあ……それにしても、この宿が空いてて助かったよ、ほんと」

ラピス 「んー……なんか安心したら、装備が重く感じてき
ちゃった」

ラピス 「へへ、って言っても、あたしなんてキミと比べた
ら全然軽装だけどね」

ラピス 「キミもその鎧脱いじゃないなよ。一人じゃ難しいん
なら手伝ってあげるよ？」

ラピス 「おっ、“頼むわ”なんて素直だねー。それじゃ、
後ろを向いてもらっていいかい？」

ラピス 「ん、しょ……、よっ、と……うん、留め具も外し
たっと……そしたら今度は腕を伸ばしてくれ
る？」

ラピス 「よし、んじゃ、チェストを引っ張るね。よ、い…
しょっと、……おもたー！！」

ラピス 「……ふーっ、相変わらずゴツイ鎧だけど、これも
随分ボロボロになっちゃったねえ」

ラピス 「出会った頃はピカピカだったのにね」

ラピス 「えっ？ いつもあたしが前に出過ぎるせい？
うっ、それは……感謝しておりますう……」

ラピス 「あ、そだそだ、出会った時のこと覚えてる？」

ラピス 「うん、ここの、一番でっかい凹みが出来た時の話だよ」

ラピス 「あたし、獣人だからさ、周りの人は気味悪がつて、全然一緒に冒険してくれなかったんだよね」

ラピス 「それで、『実力で見返してやるー！』って思ってた、つよい魔物を倒す依頼を受けてさ」

ラピス 「ところがもう、その魔物が強いなのって……あたし、逃げるのだけで精一杯だったし」

ラピス 「もう捕まっちゃう！ 一巻の終わり！ って時だよね……キミが庇ってくれたのは」

ラピス 「んで、二人してほうほうの体でなんとか逃げ出してるさ」

ラピス 「それからだよ、なんとなく腐れ縁みたいにな、一緒に冒険をするようになったのって」

ラピス 「むー、なんで笑うの……危なっかしいから側についてるだけだ、って？」

ラピス 「そっちこそ頭カッチカチだから、急に襲われた時とかは、あたしに救われてるでしょ！」

ラピス 「……ぷっ、くすくす。やっぱりあたしたち、なんだかんだ言っているコンビなのかもね」

ラピス 「キミはこんなすごい相棒に出会えたことに、感謝するよーに！」

ラピス 「なによー、その苦笑いは……もお……」

ラピス 「そういえば、今日は結構汗かいちゃったね」

ラピス 「この地方は涼しい方だけど、魔物倒すのに時間がかっちゃったからねえ……」

ラピス 「って、ええっ！？　なんでキミ、いきなり服を脱いでるのっ！？」

ラピス 「あ、汗を拭くって……それなら、お風呂にいいじゃない！」

ラピス 「ここの宿ってお風呂ない？……そういえば、そうだった……！？」

ラピス 「だ、だからってあたしの前で脱ぐことないじゃないっ……！」

ラピス 「そ、そのお……あたしだって、一応女の子……なんだしっ……！」

ラピス 「んもう……キ、キミが意識しなくても、あたしが意識するのっ！　ほら、早く服着てっ……」

ラピス 「じゃないと……じゃないとあたし……わうう……ふう……ふうう……」

ラピス 「わふっ……！ もう我慢できない……！ ……つて、なんで、逃げるの！？」

ラピス 「あ、あたしをこんな風にさせたのは……キミ、なんだから……」

ラピス 「あたしをこんな風にさせたのは……キミ、なんだから……逃げちゃ、ダメだよ」

ラピス 「“どういうこと？” だって……あれ、言ってなかったっけ？ 獣人ってのはね、……うふふ……発情期があるんだよ」

ラピス 「さっきまで話をしてる時も、結構我慢してたんだけど……」

ラピス 「はあ……はあ……それが、今さ……キミの立派な裸なんて見ちゃったから……」

ラピス 「あたし、もう……我慢、できなくなっちゃったんだよね……」

ラピス 「ふう、くうん……だからあ……責任取って……あたしの、発情を……鎮めてくれない？」

ラピス 「ほら、もう……逃さないん……だからあっ……♪」

●トラック2

ラピス 「ふーっ……ふーっ……えへ、えへへ……ちようど
ベッドの上に、乗っかっちゃったね」

ラピス 「もしかしてキミもちよつとは期待してたのかな？
なーんて」

ラピス 「うふふ、逃げようとしても無駄だよ。力ならあた
しの方が強いって、相棒のキミが一番よく分かっ
てるもんねえ？」

ラピス 「すんすん、すう、すうう……はあ……男の人の匂
い嗅いでるとお……どどん興奮が大きくなって
くるう……」

ラピス 「はあ……はあ……自分でも不思議だよお……匂い
だけなのに、頭が痺れちやいそうな感じがしてく
る……」

ラピス 「これが、発情期ってやつなんだ……いつも以上に
エッチな気持ちになっちゃうし、今までは、発情
期中に男の人に近づかないようにしてたから……」

ラピス 「ん？ 一人のときはどうしてたかって……それ
は、自分で切なくなったトコロ、触ってたよ……
……」

ラピス 「右手でえ……敏感になったおっぱい触りながら、
おまんこの中、じゅぶじゅぶ弄ってたの……」

ラピス

「おまんこ弄ってる手……左手が、上の方にある
ぽっちに触れると、ビクビクッ、ビクビクッ、っ
て、何度も何度も頭真っ白になっちゃうんだよ」

ラピス

「あ……キミも、ちょっとビクってしたね？ あた
しがおまんこ触ってるどころ想像して、興奮して
る？」

ラピス

「隠さなくてもいいよお……あたし、鼻がいいから
……キミから男の人の匂い、どんどん強くなっ
てるの、すぐ分かっちゃうからね、ふふっ」

ラピス

「汗拭く前だったからあ……ほんとにおに濃厚な、男
の人の匂いするねえ……クラクラしちゃいそうだ
よお……」

ラピス

「はあ……はあ……くう、ううん……もう、我慢出
来ないよ……我慢、出来ないっ、はううっ……
……！」

ラピス

「かぶっ……んむっ、ちゅっ、ちゅっ……」

ラピス

「んんう……えへへ、知ってた？ お耳って、その
人の匂いが一番強く出るんだよ……ん、ちゅっ、
ちゅっ……」

ラピス

「キミの味はあ……あたし、とっても好き……！
ふう、くうん……チュウ、していると……」

ラピス 「匂いと、味、が……頭、焼いちゃうみたい……
ビリビリくってるう……」

ラピス 「もっと……もっと欲しい、欲しいよお……キミの
匂い、もっと味わいたい、ん、ちゅうう……」

ラピス 「ちゅっ、ちゅっ……んれるっ、ちゅ、んちゅる……
……じゅううっ、んじゅっ、ちゅっ……」

ラピス 「んじゅっ、ちゅっ、ちゅううう……ぶあ……
はあ、んあ、はあん、くうう、んっ……」

ラピス 「ん、んうう……？ キミの、脱ぎかけのズボン……
……なんだか変な形になってるね……」

ラピス 「あ、もしかしてえ……おつきくなっちゃった……
……？ お・ち・ん・ち・ん……♪」

ラピス 「ふふーん、普段は全然女扱いしてくれない癖にい……
……ペロペロしてたら、すぐ大きくなっちゃう
んだ……」

ラピス 「いつもはムッツリしてるのに……キミって、本
当はとってもえっちさんなのかなあ……？」

ラピス 「ちゅっ、ちゅっ……んん……舐めると、ビクン、
ビクンってズボンが揺れるの、おもしろーい♪」

ラピス 「切ない？ 辛い？ えへへえ、やだあ、そんなや
らしい顔であたしのこと見てえ……」

ラピス 「んむ、ちゅ、れる……仕方ないなあ……触ってあけても、いい、よ……？」

ラピス 「べ、別にあたしが触りたい訳じゃなくて……キミが苦しそうだから、仕方なく、だからだもんねっ、ふふーん」

ラピス 「えへへ……んふう……それじゃあ、ズボンおろしちゃうね……いひひい……」

ラピス 「ふああ、ひやう、ん、くうう……うううんっ……」

ラピス 「キミのおちんちん、すごいことになっちゃってるね……」

ラピス 「もう、破裂しちゃいそうなくらい大きくなって……怖いくらい、血管がビクビク動いてる……」

ラピス 「先っぽから、トロトロ……ってしよっぱい匂いのするお汁も垂れてて……男の人のって、興奮するとこうなっちゃうんだね……」

ラピス 「えへへ……小さい時は、前……に事故で見たことあったけど……」

ラピス 「あんな可愛いのが、こんなゴツゴツした魔物みたいな、こわーい見た目になっちゃうんだね……」

ラピス 「でも、なんだか目が離せなくなっちゃってる……
見てると、もっと興奮しちゃうみたいで……」

ラピス 「ね、ね。男の人も、えっちな気持ちちが治まらなくな
ったら、自分の手で気持ちよくなるんだよ
ね？」

ラピス 「だ、だったら、あのさ……あたしの手で、気持ち
よくしてみてもいい……？」

ラピス 「あっ、また逃げようとして……むう、決定です！
おちんちんを、あたしの手で気持ちよくしてあ
げちゃうからねっ！」

ラピス 「そ、それじゃあ……触っちゃう……からね……」

ラピス 「すう、すう……んんう、はああっ……」

ラピス 「ん、くっ……うわ、これ……すご、熱い……」

ラピス 「んんっ……あたし、ただ触ってるだけ、なのに……
……おねだりするみたいに、指に……うう、絡みつ
いて来てるう……」

ラピス 「あっ……先っぽのトロトロ、どんどん溢れてくる
ね……うわあ……あたしの手、ビショビショに
なっちゃいそ……」

ラピス 「ううん、大丈夫。全然嫌じゃない……っという
か、むしろこーふんしてる……んん……」

ラピス

「あたしがおまんこ触るといっぱいお汁出ちゃうみたいにい……男の人も、えっちな気分な時はいっぱいお汁出ちゃうんだねえ……」

ラピス

「でも、やっぱこのままだと、うふふ……苦しい、よね？」

ラピス

「一人でやってる時は、どうしてるの？」

ラピス

「……恥ずかしがらなくてもいいじゃない、もうあたしたち、こんなこともしちやってるんだからあ……♪」

ラピス

「うん……うん……握って、上下に動かす……ふむふむう……」

ラピス

「それじゃあ、女の子に押さえつけられて、お耳ぺろぺろされてえ……」

ラピス

「なさけなーく大きくなっちゃってる、なさけなーいおちんぽをお……」

ラピス

「あたしがいっぱい、シコ、シコ……してあげるね……♪」

ラピス

「ふふっ、またビクビクしてえ……堪え性がないなあ……焦らなくても、ちゃんとしてあげるって、ほらあ……」

ラピス 「ん、ふう……んんっ、んっ……はっ、んっ……
んっ、んん……」

ラピス 「す」……シコシコ……っしてる、と………どんどん大
きくなってくみたい……」

ラピス 「ズボン脱いだ時でも、びっくりするくらい大き
かったのに………あたしの手の中で、まだ大きく
なってるう……」

ラピス 「はあ……はあ……キミの匂いが、すっごい濃く
なってる………あたしも、えっちな気分………これ、
とまんないよお……」

ラピス 「んんんっ………！ もっと、もっと欲しいよっ……
キミのこと、もっと欲しくなっちゃってるっ……
……」

ラピス 「んじゅっ、ちゅっ………ちゅううつ、ちゅぱっ、ん
じゅっ、んじゅる………ぷあ、ふあ、くうう……」

ラピス 「ちゅむっ、れじゅるっ………ちゅぶちゅぶ………れ
る、れる………れろお………れる、れるるっ……」

ラピス 「んふう………耳を舐めると、おちんぽが………どんど
ん興奮してくるの、分かっちゃうよお……」

ラピス 「あたしも、キミの匂い嗅いで………もお、頭の中
………蕩けて来ちゃってる……」

ラピス

「大人の人のしてる、こーびって、こういうことなのかな……おちんぽ使って気持ちよくなってるんだもん、こーび、だよね……♪」

ラピス

「あたし、もっともっと……キミとこーび、したい……お耳ペろペろこーび、もっとしちゃうっ、からねっ……」

ラピス

「ふむっ、じゅっ、ちゅっ、ちゅうううっ、んぢゅっ、じゅっ、ちゅっ、ちゅうううっ、んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ！」

ラピス

「ぶあっ、んっ……ちゅっ！ れる、れろれるおっ、れるうううっ、れるっ、ちゅっ……じゅるる……じゅううううっ……」

ラピス

「はあ、はあっ、んううっ、んっ、わふっ、わふう……切ないの、どんどん大きくなるのに……」

ラピス

「おまんこ、イケない時みたい、にっ……すっ」「い、切ない……切ないままだよお……！」

ラピス

「ね、ね……おちんぽシコシコしたら、最後どうなるのっ、早く、最後欲しい……」

ラピス

「最後来て、もやもやうってしたの全部消える、気持ちいいの、欲しいよ……ね、どうしたらいい、どうしたらいいかなっ……」

ラピス 「うんっ、おしっこの穴から、白いの出たら終わり、なんだねっ」

ラピス 「じゃあ、ぺろぺろ、もっ、しこしこ、もお……一番、強くするからっ……!」

ラピス 「いっぱい、いっぱい……白いおしっこ、いっぱい出してっ、あたしのこと、気持ちよくしてねっ!」

ラピス 「んじゅううっ、じゆるるっ、じゅちゅっ、じゅっ、ちゅっ、んんんっ、んじゆるるるっ、じゅううっ、んじゅううっ、じゅううっ!」

ラピス 「はあっ、んむっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ! んうっ、しゅきっ、このにおいっ、しゅきっ、はああ、あああんっ!」

ラピス 「早くっ、だしてっ、しろいの、だしてえっ! いっぱいぺろぺろしゆるからっ、ほしいっ、ほしいよおっ!」

ラピス 「れるれるっ、んじゅっ、ちゅっ、ちゅ、れるるっ、んれるうっ……んちゆるっ、ちゅうっ、ちゅうううっ!」

ラピス 「ふわっ、出るっ? もう出るっ? いいよっ、出してっ、このままっ、あたしにシコシコされたまま、おちんぽ気持ちよくなってっ!」

ラピス 「んくっ、いやっ!？ほんとに白いの、出てっ、んひっ、あっ、わうっ、くうううんっ!」

ラピス 「あっ、あっ……出るの、とまらなっ……身体に、かかっちゃうっ、んんっ、きやううんっ……!」

ラピス 「はあっ、ああっ……! あちゅ、熱い……んひっ、白いのかかったところっ、燃えちやうくらいつ、ヒリヒリしゆるっ!」

ラピス 「んひっ、あ、はっ……くうう、はあ、んああ……はあ、はあんっ、まだ、出てるう……どくどく、びゆるびゆるって……」

ラピス 「これ、匂い、しゅごっ……はあん……♪ 匂いだけでっ、おまんこヒクヒクしてるう……んひい、ひいいんっ……」

ラピス 「もっと、もっと出してえ……白いので汚されるの、なんかすっごい気持ちいいっ、もっとあたしにかけてえ……♪」

ラピス 「ひゃあ、んっ、くふう、ふう、ふううん……わう、わふ……わううんっ、きやう、きやうんっ……♪」

ラピス 「くふう……はあ、ん、ふうん……はあ、ひあ、はっ……くうう、ふう、ふう……はああ、はあ……!」

ラピス 「これが、こーび……なんだ……こんなの、味わったこと……ないからあ……少し、びっくりしちゃったあ……」

ラピス 「白いの、匂い嗅いでるとクラクラしちゃうし……大人の入って、すごいなあ……」

ラピス 「んー……でも……なんだろ……自分でする時は、おまんこすっきりくってするの……」

ラピス 「今は、なんか……おまんこの中が……びくびくくって震えてるだけで、すっきりくってしないかもお……」

ラピス 「あ、もしかして……これって本当のこーびじゃないんだね？」

ラピス 「ねえ、目を逸らさないではつきり答えてよ！今のより先のこーびが、あるんだよね！？」

ラピス 「むー、あくまで教えてくれないつもり？ なんですさっ」

ラピス 「本物のこーびすれば、キミもあたしも気持ちよくなって、お互いに嬉しいじゃんかー！」

ラピス 「あ、もしかして……まだ恥ずかしがってるの？ キミってば、案外おこちゃまなんだねー？ ぷぷー！」

ラピス 「いいもん、キミが教えてくれないなら、自分でやり方探すもんねっ」

ラピス 「うーん、キミのこと舐めてるのが気持ちよかったからあ……うん、これかなっ！」

ラピス 「えへへ、脱ぎ脱ぎしましうね。こら、反抗しない！ 力では、あたしに勝てないんだからねっ♪」

●トラック3

ラピス 「ふふーん、着てるもの、全部脱げちゃったね」

ラピス 「何度か見てるけど、キミの裸ってやっぱり美味しそう……といっても、食べるって意味じゃないよ？」

ラピス 「自分でも上手く言えないけど……なんか……むー！ とにかく、美味しそうに見えちゃうの！」

ラピス 「んで、そこでわたしは考えました！ キミを舐めるのが気持ちよかったから、美味しそうなキミの身体を全部舐めちゃう……」

ラピス 「多分だけど、それが本当のこーび、だよねっ！」

「そうと決まったら、早速ぺろしちゃうけど……最初はどこがいい？」

ラピス 「ふふーん、あたしは心が広いから、それくらいは選ばせてあげる。えへへ、どう？ 偉いでしょう」

ラピス 「ふむふむ……手の指……？ そんなとこでいいの？」

ラピス 「普段からキミが怪我した時は舐めてる気がするけどなあ……その時は、えっちな気分にならなかったけど……」

ラピス 「ま、いいかつ！ 言ったからには、ちゃんと舐めてあげるからね！」

ラピス 「ちゅぴ、ん、ちゅぱ……ぺろ、れろ……んくつ……ちゅつ、ちゅつ……」

ラピス 「ちゅつ、ちゅつ……んんう……れる、れろお……」

ラピス 「んんう……どう？ ちゃんと気持ちよくなれてる……？」

ラピス 「む……なーんか余裕そうな顔してない……？」

ラピス 「やっぱ、指なんかじゃダメだねっ！ もっと気持ちいいところ、舐めてあげるからっ！」

ラピス 「気持ちいいところ、って言ったら……ふふ、ここ、だよね……ん、ちゅつ……♪」

ラピス 「あはっ、やっぱりビクってしたっ！　だよね、ちゃんと男の人でも、気持ちいいよね……乳首♪」

ラピス 「脱いだ時からずっと見えっぱなしだったからさく、気になってたんだけど……」

ラピス 「こーび、始めてからどんどん固くなってるみたいだし……あたしと同じで、感じるところなのかなく、って」

ラピス 「大当たり、だったみたいだね。おちんぽ触ってた時と同じくらい、キミの顔えっちになっちゃってるよ……♪」

ラピス 「それなら、もっとしてあげようかなく……わふふ……あたしのペロで、いっぱいペロペロしちゃからね……」

ラピス 「ああくん、む……ちゅっ……」

ラピス 「れる、れる……ちゅっ、ちゅっ……んぶあ……ちゅ、ちゅぶっ、んっ、ちゅ、んん……ちゅうう……」

ラピス 「んむっ、ちゅっ……じゅうううっ……じゅちゅっ、んふう、んっ、んっ……ちゅ、ちゅうう……」

ラピス 「ぶあ、はっ……んん……」

ラピス 「んふ、えへへ……ちゃんと感じてくれてる？
さっきから息が荒いみたいだけど……」

ラピス 「あたしは、気持ちよくなってるよ……なんか、キ
ミのことペロペロしてると、安心しちゃう……
♪」

ラピス 「もっと、いろんなとこ舐めたくなくてきちゃう……
……いいよね？ ダメって言っても、しちゃうけ
どっ……！」

ラピス 「れろ……れろ……ちゅ、じゅっ……れるる……
ちゅぶ、ちゅむ……れろお……はむ、ちゅうふう
……」

ラピス 「はあ、んっ……れるっ、れるっ……んうう……れ
るるっ、れるっ、ちゅっ、じゅるる……」

ラピス 「んむ、ちゅうふう……ぶああ……はあ、ん、はああ
……」

ラピス 「んあっ？ び、びっくりした……顔に何か当たっ
たと思ったらあ……」

ラピス 「キミのおちんぽ……もう、すっごく元気になっ
ちゃってるね……♪」

ラピス 「あたしのほっぺたに、すりすり……してしちゃてる
……」

ラピス 「すう、すう……はああ、んふう……まーたえっちな匂いさせてるよ、このエロちんぽ……」

ラピス 「あたし、キミの身体を舐めてるだけで気持ちよくなっちゃってるからあ……」

ラピス 「キミの気持ちいいとこ……おちんぽ……舐めたら、もっと気持ちよくなるんじゃないかなあ……?」

ラピス 「きっとそうだよ。絶対こーびって、おちんぽ使うはずだもんねっ!」

ラピス 「なーに、ぼーっとあたしのこと見ちゃって。もうお返事も出来ないくらい気持ちよくなっちゃってるの?」

ラピス 「でも、まだまだこれからだよ? 今度は……キミのおちんぽ、を……ぺろぺろって、しちゃうんだからあ……」

ラピス 「はあ……はあ……匂いだけで、これだけ興奮するのに、口に入れたら、どうなっちゃうんだろ……」

ラピス 「怖いくらい、だけど……期待の方がおっきいし……もう、一思いに……ぱく、ってしちゃうからねっ!」

ラピス 「んん……ああ〜ん、んう、ちゅぶぶ、んぶっ……」

ラピス 「はうんっ！ しゅご……これ、匂いが……直接、口の中にい……はあう……」

ラピス 「れる、ちゆるる……ふむ、んむ……ちゅ、じゅっ……んひい……これ、おいしい、かも……れるる、じゅちゅう……」

ラピス 「けっこー、難しい形……してて……ん……この出っ張ったところの、裏あ……」

ラピス 「すっごい、濃い匂い……してえ……れるる……んふう……この味と匂い……癖になりそお……」

ラピス 「もっと、もっと欲しい、よお……んふう……」

ラピス 「んむ、じゆる……ちゅぶ、ちゅっ……れる、れじゆるっ……んふう、んっ、んっ、んむう……れるる……」

ラピス 「はあ、はあ……舐めれば、舐めるほど……どんどん、味……濃くなってくるう……」

ラピス 「溢れてくる、えっちなお汁……ぺろぺろしてると……れるる……あたし、も……興奮で、どうにかなりそーだよお……」

ラピス 「くう、ん……ぢゆるる……ぶあっ……ねえ、もつと深くまで、啜えてもいい……？」

ラピス 「ってか、啜えないと、無理……あたし、こーふんでおかしくなっちゃうから……」

ラピス 「根本まで、お口でずぶずぶしちゃうからねっ……♪」

ラピス 「んじゅぶっ、んじゅっ、じゆるるっ、じゅっ、ちゅ……じゅぞぞっ、んむっ、ちゅっ……！」

ラピス 「じゆるるっ、じゆるるっ！ んんうっ、じゅううっ、じゅぞっ、じゅぞっ、じゅうううううっ！」

ラピス 「れるれる……えうう、はうっ……んっ、キミのおちんぽ……お汁とよだれが混じって、とってもえっちな味い……」

ラピス 「にひひ……こんなの啜えたままだったら、あたしホントにおかしくなっちゃうよお……」

ラピス 「おかしくなっちゃいそうなほど、興奮してる……ん、ちゅっ……じゅぶぶっ、じゆる、じゅむむっ……！」

ラピス 「んーっ、じゅっ、んうううっ、じゆるっ！ じゅちゅっ、じゅーっ、じゆるるっ！」

ラピス 「ねえ、ねえ、また出るんでしょ、白いの、また出るんでしょっ……!」

ラピス 「今度こそ、お口こーびで、あたしのこと、気持ちよくさせてっ!」

ラピス 「白いの、くく飲んでっ、あたしも一緒に気持ちよく、なるのっ!」

ラピス 「じゅるるっ、じゅるっ、んじゅるっ、ちゅぶっ、んじゅ、じゅう、じゅちゅうっ!」

ラピス 「好きな時につ、だひて、いいからっ、んっ、れるるっ……!」

ラピス 「あたひの、ことっ、気持ちよく、させてっ、んうっ、んっ、んっ、えうううっ、んちゅるっ!」

ラピス 「んむっ、んっ、んっ、んっ、れちゅるるっ、じゅっ、ちゅっ、ちゅううううっ!」

ラピス 「じゅるるるっ、じゅる……ぶぐっ、んぐうううっ!」

ラピス 「ひぐうっ!？ んううっ、あうう、んっ、きやううんっ、出てっ、んっ、じゅずずっ、ちゅるるっ……!」

ラピス 「おくひの中っ、いっぱいっ、んぐっ、くっくっ……んっ、すごい、量っ……」

ラピス 「じゅるる、ちゅむ、んじゅるるる……変な、味なのにい……これ、飲むの止まんないよお……んくっ、くく、こく、こくんっ……」

ラピス 「じゅむ、ちゅっ……くく、くく……れる、じゅうう、こく、んっ……えう、んん……ちゅるる……じゅるっ……」

ラピス 「んむう……ちゅぶ、ん……じゅるる……おいひ、これ、すぎ、かもお……白いの、おいしい……おいしいよお……くく、くくんっ……」

ラピス 「ぶはっ……んくっ、はーっ……はーっ……しゅご……お口でこーびするの、こんなに……すごいんだ……くあ、ああん……」

ラピス 「やあん……まだ、喉、に……キミのがねばねばくっくっついてるよお……」

ラピス 「ぶああ……頭の中、キミの匂いと味でいっぱい、でえ……これ、ほんと……どーになっちやいそお……」

ラピス 「はあ……はああ……くあっ、はっ……はーっ……はああ……」

ラピス 「うぐ、うう……キミは、すっごく気持ちよさそうな顔してくれてるね……なんだか、嬉しいよ」

ラピス 「で、でもお……あたし、あんなに頑張ったのに……なんだか、まだ……お、おまんこが……満足してない、っていうか……」

ラピス 「うーっ、おっかしいなあ……こーびのやり方、間違ってるのかなあ……？」

ラピス 「……ねえ、ホントはキミ、正しいやり方知ってるんじゃないの？」

ラピス 「……むー、またそうやって目を逸らすう……こんなことまでしてるのに、まーだ恥ずかしいとか言う訳え？」

ラピス 「んー……うーん、ううーん……どうしたら、おまんこ気持ちよくなれるかなあ……」

ラピス 「って！ そうだよ！ あたしのおまんこ、今まで使ってなかったじゃん♪」

ラピス 「キミの一番気持ちいいおちんぽ、とお……あたしの一番気持ちいいおまんこ、を……」

ラピス 「一緒に擦るのが、ホントのこーび……なんじゃないかな？ ね、ね、合ってる？」

ラピス 「あ、逃げようとして……にひひー、ってことは、正解、って言ってるようなもんだよ？」

ラピス 「逃げちゃ、ダーメ♪ 発情が苦しいあたしを助けると思ってえ……」

ラピス 「もう、我慢の限界とつくに過ぎちゃってるおまんこ……キミが、すっきりさせてちょうだいね♪」

●トラック

ラピス 「おまんことおちんこくつつける前に……あたしもズボン、脱がないとね」

ラピス 「んっ……！？ ふ、んうう、くっ、はああ……んあっ、あっ……はあん、あはあ……」

ラピス 「お汁、で……パンツ、張り付いちゃってえ……」

ラピス 「脱いだと……メリメリ、って、おまんこのお肉ごと、持っていかれるみたい……でえ……」

ラピス 「ん、ふ……くうん……それだけで、すっごい、ゾクゾクしちゃう……」

ラピス 「くふう、んうっ……！ はあ、はあ……えへへ、おパンツ脱いじゃったあ……」

ラピス 「うわ、なんかもう……お汁の量、すごいことになっちゃってるみたい……」

ラピス 「キミも、見えるでしょ？ キミのことぺろぺろしてただけで、あそこから、湯気が上がっちゃくらい、熱くなってる……」

ラピス 「自分で触ってる時より、もっとすごいことになっちゃってる……まだ、触ってないってのにね……♪」

ラピス 「にひひ、キミもすっかり釘付けになっちゃってるね……あたしのお・ま・ん・こ♪」

ラピス 「今からことお……キミのおちんちんをこすり合わせてえ……こーび、しちゃうからねえ……」

ラピス 「あっ、まーた逃げようとしてえ……いくじなしい」

ラピス 「んっ、えへへ。どう？ これなら逃げられないでしょ」

ラピス 「あっ、ふあ……お股の間に……キミの……硬いの……挟んじゃったあ……♪」

ラピス 「ん、んっ……割れ目、に……こすれて……きやうんっ……どきどき、するう……」

ラピス 「あっ、んっ……これ、きもちい……すりすりするの、とまんなっ……はっ、あっ……んうう、きやうんっ……！」

ラピス 「はあ、はあ……ああ、んっ、んっ……二人のお汁、混じってえ……すっごい、えっちな音……してるね……？」

ラピス 「ぴちゃぴちゃ……ぴちゃぴちゃ……んふふ、お股でするこーび、やっぱ気持ちいいねえ……」

ラピス 「でもお……これ……んん……ずっとしてると……お腹の中……切なく、なってくるう……」

ラピス 「ごくっ、ん、ふうう……や、やっぱり……これ、中に……入れるん……だよね……」

ラピス 「おまんこの中、にい……おちんちんを突っ込む、のが……ホントのこーび……なんだよね……？」

ラピス 「んふう……あたし、今になって、ちょっとドキドキしてきちゃった……」

ラピス 「これから……本当にキミと……こーび……しちゃうんだね……」

ラピス 「うふふ……キミは、こういうこと経験あるのかな？」

ラピス 「あたしは、初めて……だよ。でも、最初がキミで、なんだか嬉しいな……」

ラピス 「ずっと一緒にいたから……なんか、安心出来るし……」

ラピス

「え、べ、別につ、緊張なんてしてないよっ！」

ラピス

「もお……あたしが少し静かになったら、そうやってからかうんだから……」

ラピス

「ふーん、いいもん。それじゃあ挿れちゃうからね？ 気持ちよすぎて、おかしくなっちゃっても知らないよ？」

ラピス

「えへへえ……それじゃあ挿れちゃう、ね……ん、っしょ……くふう、んんう……」

ラピス

「はあ……んんっ……くうう、んっ、ふっ……ふうう、んっ、はああ……はあっ……」

ラピス

「ちょ、たんま……うひ、これ、変な感じ……あたしの中が、どんどん広がっていく、みたい……」

ラピス

「自分の指ですると全然違う……お腹、苦しい感じ……」

ラピス

「え、む、無理じゃないよ……ちゃんと出来るもんっ！ もお、余裕ぶっちゃってえ……」

ラピス

「キ、キミの方こそ、気持ちよすぎて、すぐに白いの、出さないでよねっ、ふんっ！」

ラピス

「もう……挿れちゃうんだから……」

ラピス 「ふうう……くあつ、はっ……ああんっ、んっ、
んっ……くうう……ひあ、はああ……」

ラピス 「はあ、はあ……んんんっ……ふう、ふうう……」

ラピス 「えへへえ、ほら、ちゃんと挿れられた、でしょ…
…」

ラピス 「……うん、大丈夫。全然、苦しくなんてないよ」

ラピス 「……っつかあ……さっきまで興奮してたせいかな……
早く、おまんこで沢山感じたくて、しょうがない
くらい……」

ラピス 「くすっ、あたしってえっちなあ？」

ラピス 「でも、キミのおちんぽは嬉しそうだね……おまん
この中で、早く動いて、っっておねだりしてるみ
たい……」

ラピス 「いいよお……おまんこの中のお肉、でえ……」

ラピス 「キミの白いの、ビュ、ビュっって、止まらなく
なるまで、いっぱいシコシコしてあげるから、ね
……♪」

ラピス 「んんう……はっ、あっ、ああん……くあつ、
はっ、はっ……」

ラピス 「えへへ、どう、かな……おまんこの中、気持ちいい？」

ラピス 「って、聞かなくても分かるね。くすっ、さっきまで抵抗してた癖にい……」

ラピス 「もう、おちんぽのことしか、考えられなくなってるみたいじゃない……」

ラピス 「やらし〜目で、あたしのこと、見てくれてるね……うふふ、どうかな……」

ラピス 「ふあ、んくっ、んっ、はっ……こうして、お股の上で、ぴよんぴよんしてるとお……」

ラピス 「おっぱい、ふるん、ふるん、って跳ねて、とってもやらしいよね？」

ラピス 「あたし、気づいてるんだよお……いつも一緒に冒險してる時でも、たまにあたしの胸、ジーツと見てるでしょお？」

ラピス 「えへへ……いいよ……今は、おまんこの感触と、裸のおっぱいが震えるとこ……」

ラピス 「あたしのえっちなところ、全部全部味わってもいいんだからね？」

ラピス 「ふっ、んっ……あたし、しも……発情してるから、なのかもだけど……」

「キミに、えっちな目で見られてると思うと……
くうんっ……どんどんこーぶんしてきちゃう……
……！」

「このまま……このまま一緒に気持ちよくなるーね
……！」

「気持ちよくなって、白いのいっぱい、出しちゃう
うね……！」

「くふうっ、んっ、はっ……はっ、はっ……
くうう、はあんっ……！」

「や、あっ……は、はっ……これ、腰、止まん……
……んう、くうんっ！」

「えへへ、おちんぽってこんなに気持ちよかったん
だ……これ、癖になっちゃうよお……！」

「ふうう、んくううっ……！ 自分の指なんかよ
りっ、全然いい、これっ、いいよお……！」

「ああんっ！ くあっ、はあんっ！ すご、これ、
ビリビリするっ、おまんこビリビリっって
えっ！」

「んきゅっ、もっと、もっとっ、欲しいっ、ビリビ
リ欲しいっ！」

ラピス 「あんっ、あんっ！ 奥っ、ビリビリするのっ、もっと、奥に……いあ、は……んくうう………」

ラピス 「んくっ、あっ、きやううつ、くあっ、はあっ、あっ、ああんっ、ああああんっ！」

ラピス 「だめっ、だめっ、とまらなっ、とまらないっ、腰っ、勝手にっ、ひんっ、くっ、くううんっ！」

ラピス 「あはっ、キミ、とっても苦しそうな、顔してるっ、でも、とめないよっ、とめてあげないっ！」

ラピス 「中に、中にビュービュー出されたらっ、絶対気持ちいいからっ、絶対だからっ！」

ラピス 「出してくれるまでっ、お尻、パンパンするのっ、止めてあげないからねっ、あんっ、ああんっ！」

ラピス 「きやうつ、くっ、あっ、はああっ、んうう、んう、ああんっ、はああっ、ああああっ！」

ラピス 「はやっ、はやくっ、うぐううつ、だめだめっ、おまんこ壊れちゃうからっ、さっさと出してっ！」

ラピス 「ビュービューしてっ、中ビューって出してっ、おまんこの中に白いの、ビューって出してえっ！」

ラピス 「ほらっ、ほらっ、ほらあっ！ いっぱい、お尻ぎゅーぎゅーするからっ、早く、んいっ、早くうっ！」

ラピス 「やつ、あああっ、んくっ、んあっ、あああっ！はっ、あっ、ああんっ、んひいんっ！」

ラピス 「おちんぽっ、あああっ、膨らんで来てるっ、きゃんっ、これ、出るんだよね、出るよね、ね、ね、ねえっ！」

ラピス 「遠慮とかっ、そんなのっ、全然いらなからっ、ほらっ、出してよっ、おまんこに出してよっ！」

ラピス 「あたし、あ、あ、もう、限界だからっ、早くしろおっ、早くだせえっ！」

ラピス 「ほ、ら！ だ、し、て！ だ、し、て！ 白いの、出せえっ！」

ラピス 「ああっ、あっ、あっ！ おちんぽ震えてるっ、やああっ、くる、これくるよね♪」

ラピス 「ほら、ほら、ほらっ♪ だ、せっ、出せえっ、出して、だ・し・てっ♪」

ラピス 「も、あたし、限界だからっ、ほらあゝゝゝゝゝっ！」

ラピス 「おひっ!?! あっ、おっ……くううっ、ん
ひい!?! ひあっ、ああああんっ!?!」

ラピス 「お、あっ、くひっ、ひい、ひいいんっ!?! で
てっ、るっ、中でっ、あああっ、中で、びゆる
びゆるってえっ!?!」

ラピス 「んひっ、あ、へあっ、はあ、はあんっ!?! これ、
しゅ」っ、お、あっ……!?!」

ラピス 「むり、むりむりむりっ!?! これ、気持ちよすぎ
てっ、飛んじゃう、よっ、あたし、これ……飛ん
じゃうっ!?!」

ラピス 「きやうっ、んぐっ……くううううっ……」

ラピス 「んやっ、ああああああっ、くあああああああ
あっ!?!」

ラピス 「おおっ!?! んおっ!?! くうっ、んひっ!
あっ、あっ、あっ……あああ……はひい、ひいん
……!?!」

ラピス 「やだ、やだやだやだっ、まだ出てるっ、だめっ、
ああああっ!?!」

ラピス 「でるとっ、ヘンになるからっ、くうううっ!?! 奥
に、ビシャビシャするの、やめっ、ひい、ひうっ
うっ!?!」

ラピス

「お……おっ……おおおっ……これ、頭、飛んじゃ
う……真っ白になるっ、おあっ、く、ああんっ……
えあっ、はっ……」

ラピス

「んぎゅっ!？ まだ、でりゅっ……おっ、おっ……
出し、出し過ぎっ、もおっ……ばかつ、ばかば
かばかあっ……!」

ラピス

「ひぐううっ……んおっ……も、だめ……これ、無
理、はあっ……くあああっ……」

ラピス

「はひ……ひい、ひうう……はあ、はあ……はああ
……くう、ふうんっ……はあ、はあ……」

ラピス

「んあ……や……おまんこから、白いの漏れちゃう
……」

ラピス

「ん……うう……キミがせっかく、あたしの中に出
してくれたのに……うう、すっごい、もったいな
いい……」

ラピス

「はあ……はあ……で、でも……本当のこーび……
すっごい、気持ちよかった……」

ラピス

「最後の方、もう、頭真っ白で……あたし、どうに
かなっちゃうかと……思った……はあ、はあ……
……」

ラピス 「キミのこともリードしてあげられたし……ふう……えへへ、初めてにしては、上出来だったよね！」

ラピス 「……え？ すっごい苦しそうだった？」

ラピス 「心配になるくらい、感じちゃってた……って……もお！」

ラピス 「キミの方こそ？ もうヘトヘトになって、苦しそうにハアハアしてるじゃん」

ラピス 「あたしはあ……まだ、まうだ、おまんこ全然平気だけどねえ？」

ラピス 「……てか、抜いたらもう、すぐにまたしたくなっちゃったかも……」

ラピス 「おまんこ、一回気持ちよくなっただくらいじゃ、全然これ……発情、治まんない感じ……」

ラピス 「普段も、一人の時は気を失うくらいしちやってるからなあ」

ラピス 「……えへへ、もちろん乗りかかった船だもんね。キミも、あたしの発情治めるために、手伝ってくれるよね？」

ラピス 「流石に疲れた？ そっかそっか。それじゃあ今度もあたしが動くから、キミは安心していいよ」

ラピス 「そういう問題じゃない？　じゃあどういふ問題なのさ〜？」

ラピス 「う〜、もう無理っ、またおまんこムズムズしてきたっ！　もっかい、するからねっ！」

ラピス 「キミだって、まだまだおちんぽ元気にビンビンになってるじゃん♪」

ラピス 「それだけ、あたしの身体に夢中ってことだもんね♪」

ラピス 「そんじゃ、続き……しよっか♪」

●トラック

ラピス 「ん、しょ……あたしも、着てるもの全部脱いじゃうね」

ラピス 「こーびしてて、汗でもう身体中べたべただあ……」

ラピス 「んふ……これ、シャツのここ……白いの、染み込んじやってるね」

ラピス 「これ、匂い取れるのかなあ……」

ラピス 「あたし、鼻がいいから、戦ってる最中にも匂い感じちゃったら、超ヤバいね……」

ラピス 「うふふ、そんな時は、責任取ってしっかり守ってよね？」

ラピス

「んん……しょ……っと。ん？ どしたの？」

ラピス

「なーんか、やらしー目であたしのこと見てんじゃん……」

ラピス

「さっきまでもほとんど裸みたいなもんだったのに、全部脱ぐとそんなに違うもんかな？」

ラピス

「うー、なんだか急に恥ずかしくなって来たじゃん……」

ラピス

「ぐるる……あたしのことこんな思いにさせたキミには、しっかり仕返ししてやるんだからあ……」

ラピス

「何回白いの出しても許してあげないんだからねっ、おちんぽ空っぽになるまでえ……ぜーんぶ搾りとっちゃうからねっ……♪」

ラピス

「んひひ……おちんぽ、ぴくん、ってしたね。キミもまだ期待してるんじゃないん……」

ラピス

「いつもずっと一緒にいたけど、お互いにこんなにえろえろだなんて、気づかなかったね」

ラピス

「えへへ……なんか、どんどん我慢出来なくなってきた……」

ラピス

「ね、ね、チューしながら、おちんぽ入れてもいい？」

ラピス 「なんかね、キミと、ギューってくっつきながら、
こーびしたいんだ……」

ラピス 「くすっ、ダメって言われても、しちゃうけど
ねっ、ん、ふ……」

ラピス 「んんっ……ちゅっ、ちゅっ……んじゅう……ん
じゅっ、ちゅっ……ちゅうっ、ちゅっ……」

ラピス 「んふ……チュー、すきい……もっと、したい……
んうう……ちゅうっ、ちゅうっ……」

ラピス 「はあ、はあ……このままあ……んんっ、んうう……
……」

ラピス 「んじゅっ、ちゅうっ……！ んんっ、あう、んっ
……くうっ、あっ、はっ……んじゅ、んん
んっ！」

ラピス 「えへえ……上も下も、繋がっちゃったあ……んん
……これだと、あんま身体動かせない……」

ラピス 「ん、いーよ……キミはそのまま……あたしが、
パン、パンってお尻動かすからね……んふう……
はあ、はあ……」

ラピス 「んいっ、あっ、はっ……んんう……ちゅ、ん
ぢゅっ……んんっ、んっ、はあん……」

ラピス 「な、んかあ……この格好で、パンパンしてると……胸、擦れちゃう……んい、あひっ……」

ラピス 「きゅんっ、あんっ……！ おまんこだけでも、気持ちいいのにい……乳首、キミの身体で、こすれる、とお……」

ラピス 「や、あっ……はあ、はっ……んくっ、くううっ……！」

ラピス 「身体中、気持ちよくなっちゃうみたい、で……ああん……これ、とってもすごい、よ……んん、んうう……」

ラピス 「おまんこ、パン、パンってするとお……胸も一緒にズリズリ……ってしてえ……」

ラピス 「もお、身体全部気持ちよくて……変になっちゃいそお……んじゅっ、ちゅっ……んふう、んふう……」

ラピス 「ああんっ……もう、もう……気持ちいいの、止まらないの……身体全部……全部う……ちゅううっ、んじゅううっ……！」

ラピス 「んんうっ、んふ……じゅ、ちゅ……あむう、じゅちゅる……んあっ、はっ、あっ……んんう、んじゅっ、んうっ、くうんっ……！」

ラピス

「はあんっ……！ んんっ！ くあっ、んん……
じゅ、ちゅ……んんう……ぢゅうつ、ぢゅるるっ
……ふうう、んふうう……」

ラピス

「はあ……はあ……なんだか、こうしてぴったり
こーびしてると、すっごい幸せになってきてえ…
…」

ラピス

「終わりたくない、ずっとずっとキミとくっついて
たい、って思っちゃうよ……」

ラピス

「そ、そりゃあ……おまんこはうずうずしてるから
……気持ちいいのこなかったら、頭おかしくなっ
ちやいそう、なんだけとお……」

ラピス

「キミ、も……あたしとくっついてて幸せ……って
思ってくれてたら……なんか、嬉しいな……」

ラピス

「んっ……きやうつ、あっ、はあん……ど、どした
の……くああっ……ああんっ……！」

ラピス

「腰っ、急にそんな……動かして……ああっ！
はあんっ！ 下から、あたしっ……くうんっ！」

ラピス

「キミ、にっ……くふうんっ……下からっ、突かれ
ちやってっ……ひいんっ！」

ラピス

「だめっ、それっ、深い……奥、深いとこ当たっ
ちやってるっ、行き止まりっ、突かれてる
うっ！」

ラピス 「んひっ！ くうっ、んふうっ！ やっ、それっ、あっ、あっ！ くううっ！ ひうううっ！」

ラピス 「おくっ、ぱっかりっ！ あっ、あっ！ そんなにやっ、強くしゃれたらっ、んひうっ、ああああっ！」

ラピス 「気持ちいいのっ、止まらなくっ、なっちゃうってばあっ！ はあああっ、はああああんっ！」

ラピス 「おっ、んおっ、ほっ……何回も、来てるっ、おっきなのっ、何度も何度もっ、おまんこに来ちゃってるうっ！」

ラピス 「んぐっ、ん、もおお……あたしの身体っ、好きに使っちゃって……！」

ラピス 「最初は、あんなに嫌がってた癖に……もおっ、知らないんだからっ！」

ラピス 「あたしも、好き勝手に動くから……キミのおちんぽっ、壊れちゃっても知らないんだからねっ……！」

ラピス 「ふんっ、ふんっ、ふうううっ！ このっ、むっつりちんぽおっ……！」

ラピス 「あたひのっ、まんこの方がっ、強いんだからっ、うううっ、それっ、ちゃんとわからしえる、からねっ！」

ラピス 「ほらっ、ぱん、ぱんっ！ ぱん、ぱんっ！
どお、まんこギューギューしまってるでし
よっ！」

ラピス 「はやくっ、まんこに負けてえっ……だらしな
くっ、びゅーびゅーしちゃえっ、ほらっ、ほらほ
らあっ！」

ラピス 「体重かけてえっ……んぐうううっ……ちん
ぽっ、全部絞っちゃうんだかりやっ、んひっ、
あっ……はああっ……あっ！」

ラピス 「どーだっ、どーだあっ……！ ほらっ、負けちゃ
えっ、ちんぽ負けちゃえっ！」

ラピス 「女の子につ、ちんぽしごかれてっ、だらしく出
しちゃえっ、全部出しちゃえっ、ほらあっ！ ほ
らあっ！」

ラピス 「んぎゅっ、くっ、ふっ！ あううっ、んひうう
うっ！ またっ、下からずんずん、ってっ…
…！」

ラピス 「あたしだって、負けにやい、んだからっ、んぐっ
……もっと、もっと激しく、しちやうっ、んうう
ううっ！」

ラピス 「はあんっ！ んっ、くあっ、はっ、んっ、んっ、
んううううっ！」

ラピス 「あっ、あっ、おちんぼがつ、あたしの中でっ、
んどん大きくなってるのっ、感じるっ！」

ラピス 「まんこの中でっ、破裂しちゃいそーなほどっ、
おっきくなってるううっ……！」

ラピス 「いーよ……いーよっ、出してっ、あたひの一番奥
につ、ぎゅーってくつつけながら、ドビュドビュ
全部だひてっ！」

ラピス 「ふあっ、あっ、あっ！ 欲しいっ、欲しいのっ、
白いの奥につ……あああっ、切なくて、変な
のおっ！」

ラピス 「ふぎゅっ、んっ、くっ、あっ、あっ、あっ！ 腰
……止まんな……んんうっ……この、ままつ……
出してっ！」

ラピス 「わうっ、んっ、わふうううっ！ あたしの、おま
んこにいっ……！ キミの、ちようだいっ……！」

ラピス 「ふiiiiiiiiいっ！？ んいっ、あっ、はあああ
あっ！ んうううっ、んあっ、あああああ
あっ！」

ラピス 「しゅごっ、んっ、あっ！ 出てっ、出てりゅっ、
ひいんっ、あぶっ、んうううっ！ くううううう
んっ！」

ラピス

「す……ごっ……んんっ！ 中、でっ……びゅー、
びゅーってえっ……ぐるぐるして、るっ、あ
ひっ、ひいいいんっ！」

ラピス

「もっと……もっとお……全部、全部出してっ……
……」

ラピス

「キミの、気持ちいいのお……まんこの中につ、全部っ、はあっ、全部吐き出してっ、ああああっ、
はあああんっ！」

ラピス

「んいつ、んっ……くう、はあっ、あああんっ！
すご、おっ……中、入り切らないっ……どぼど
ぼっ、って……溢れてるう……！」

ラピス

「はあーっ……はあーっ……んぐ、あぎっ、ひっ……
…これ、ほんとにすぎ……まんこにビュービュー
されるの……すごすぎい……」

ラピス

「ひあ……は……ひい、ひいん……うわ、わ……す
ご……おまんこ、泡立っちゃってる……」

ラピス

「キミの白いのと、あたしの気持ちいいの、グチョ
グチョに混ざって……くっついてるとこ、ドロドロ
口になっちゃってるねえ……」

ラピス

「ふう……ふう……はああ……ん、くううんっ……
……」

ラピス 「お、んっ……はあ、んあああ……すっご……お股の間から、壊れちゃったみたい……混ざったお汁こぼれちゃってるう……」

ラピス 「んふ……もったいないなあ、これ……あたし、おまんこちっちゃいのかなあ……？」

ラピス 「今度は、出してもらったお汁、全部飲めるように……もつとがんばる、ね……」

ラピス 「……うん？ 今度も、だよ。こんな気持ちいいことなんて、一回で終わりな訳ないじゃん♪」

ラピス 「あたしがあ……また、発情して耐えられなくなったら……キミのお・ち・ん・ぽ……また、ズブズブして？ ね？ んふふ……♪」

●トラックの

ラピス 「ふうー……汗かいちゃったねえ。出来ればお風呂に入りたいけど……」

ラピス 「そもそも、この宿にお風呂ないのが切っ掛けだったね……」

ラピス 「ん？ なんでそんなにあっけらかんとしてるか、って……」

ラピス 「つがいの人とえっちなことするなんて、フツーのことじゃん？」

ラピス 「あたしは、キミが仲間に誘ってくれた時から、
ずっと『つがい』だと思ってたんだけどなあ？
ふふっ」

ラピス 「キミだって、あたしとえっちなこと出来て、嬉し
かった癖にい。人間のヒトって、そんなにえっち
なことが恥ずかしいのかな」

ラピス 「少しは恥じらいを持て、って……あたしだって、
キミの前でしか、こんな姿見せないよ……」

ラピス 「大切な大切な、あたしの『つがい』の人だから
ねっ！」

ラピス 「……なに後じさりしてんのさ。あんだけ気持ちよ
さそうにしてた癖に、今更責任取りませーんと
か、あり得ないんだからねっ！」

ラピス 「あ、そうだ。宿からちよつと行ったとこに、川が
あったよねえ。そこに水浴びしに行こ？」

ラピス 「あたしが背を流してあげるからさ、ね……あたし
の『つがい』さん♪」

ラピス 「もちろん……水浴びしてるあたしにこーふんした
ら、襲っちゃってもいいよ……？」

ラピス 「えへへっ、それじゃー行こっよ」

ラピス

「あたしがワガママ沢山言った分、今度はキミのしたいこと、何でもしてあげるからさっ♪」
